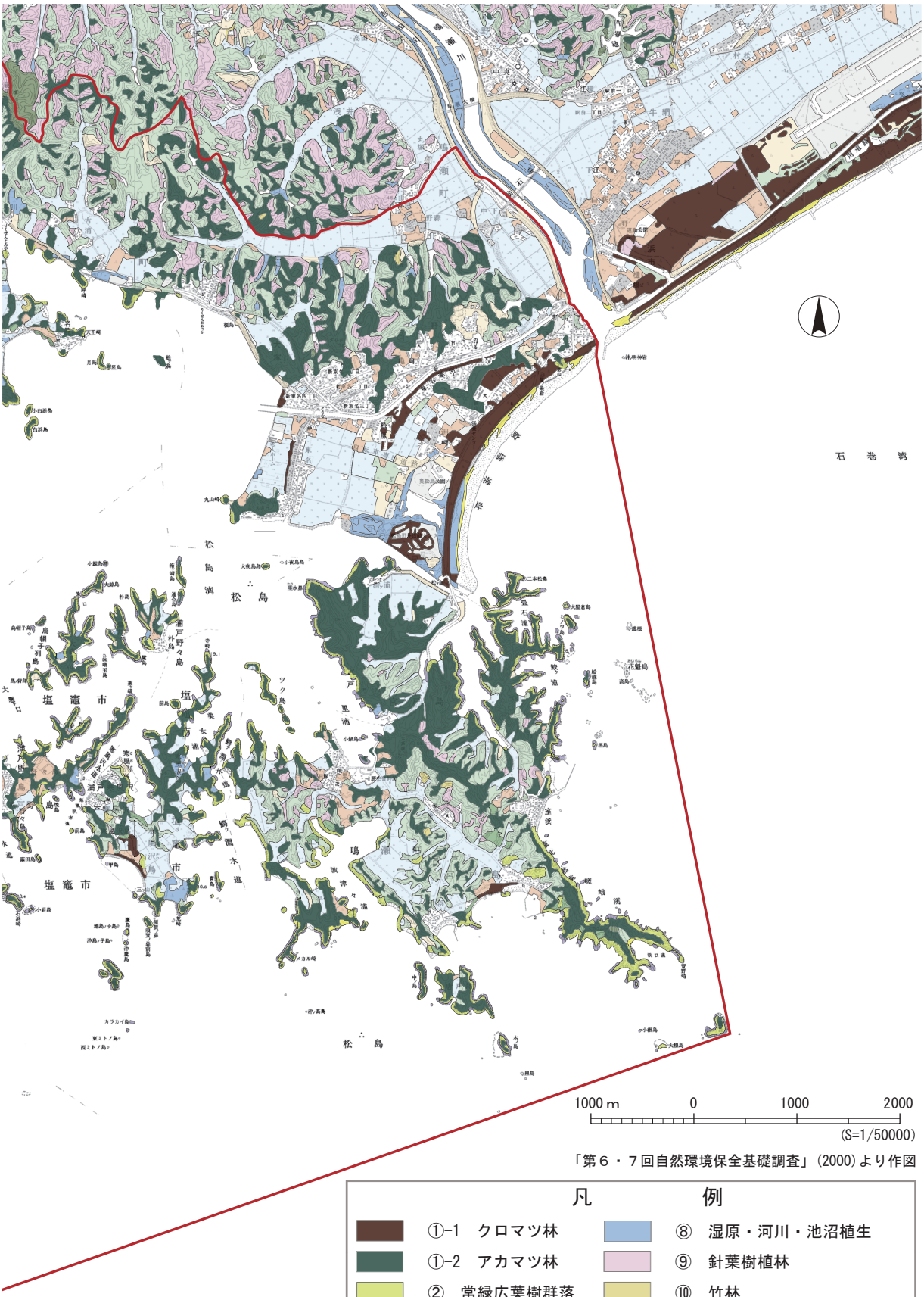


「第６・７回自然環境保全基礎調査」(2000)より作図

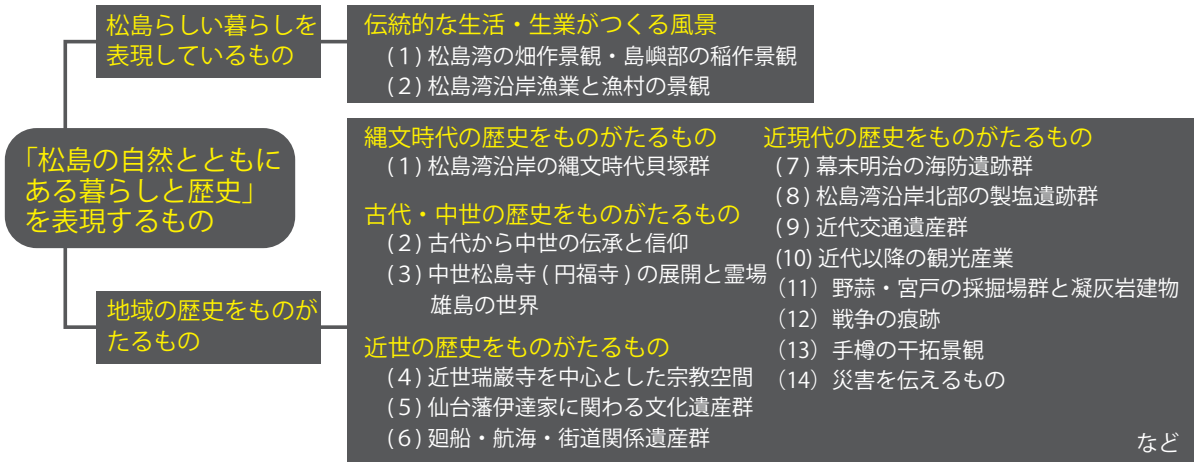
凡　例

	①-1　クロマツ林		⑧　湿原・河川・池沼植生
	①-2　アカマツ林		⑨　針葉樹植林
	②　常緑広葉樹群落		⑩　竹林
	③　モミ林		⑪　二次草原・低木群落
	④　ケヤキ林		⑫-1　水田
	⑤　落葉広葉樹二次林		⑫-2　畑・果樹園
	⑥　岩壁植生		⑫-3　牧草地・ゴルフ場・芝地
	⑦　砂浜植生		

第３－２図　特別名勝松島の植生

第４節　松島の自然とともにある暮らしと歴史

自然や歴史文化を反映した人々の営みは、現在も松島の各地域にのこり、魅力的な“松島の風景”を育んでいる。また、これらは地域の多様性を示し、“松島の風景”に奥深さをもたらしている。現在、松島の各地でみられるものについて、松島らしい風景となっているもの、あるいは地域の歴史をものがたるものに分けて例示する。



１　松島らしい暮らしを表現しているものと構成

松島の自然のなかで、人々の生活・生業や地域社会に伝わる信仰・風習などがつくる風景について、その特徴と代表的な構成には、例えば以下のようなものがある。

（1）松島湾の畑作景観・島嶼部の稲作景観

松島丘陵に囲まれる松島湾は、里山と里海が接する独特な地形を呈し、平地が少ない。そのため、丘陵や島では傾斜を利用した小規模な畑作が行われている。特に島嶼部は陸域から独立していることから、野菜の種を純粋種で交配できる種苗畑として活用された。仙台白菜は馬放（まはなし）島が採種を初めて行ったとされ、現在でも宮戸島、浦戸諸島を中心に伝統野菜として栽培されている。採種のための菜の花畑は観光資源としての魅力ももつ。

また、島嶼部の稲作は、古くから自給自足生活の一部として営まれ、今も寒風沢島南部でみられる。島では入り江や低湿地に天水を貯めて米作りを行っており、冬でも水が抜けない環境から、クロメダカなど絶滅危惧種が生息する生態系が保たれている。

第３－５表　松島湾の畑作景観・島嶼部の稲作景観の構成

宮戸の菜の花畑	東松島市	宮戸	白菜採種のための菜の花畑が見られる。「菜の花の島」と呼ばれ、宮戸島の見どころとなっている。
浦戸の野菜種苗畑と菜の花畑	塩竈市	浦戸桂島・朴（ほう）島	自然交雑を避け、野菜の種を純粋種で交配できるため浦戸諸島に仙台白菜の種苗畑が開かれた。採種のための菜の花畑は島の見どころである。
手樽の菜の花畑	松島町	松島町手樽	手樽の各地でみられ、特に古浦農村公園周辺の規模が大きい。
寒風沢の稲作	塩竈市	浦戸寒風沢	市内唯一の水田で、天水を貯めて米作りを行う。秋には収穫した稲を天日干しする昔ながらの懐かしい田園風景が見られる。

浦戸の菜の花畑（朴島）

手樽の菜の花畑

浦戸の稲作景観（寒風沢島）

（２）松島湾沿岸漁業と漁村の景観

松島湾では、近世からノリやカキの養殖が盛んに行われている。浅海内湾の特徴を活かしたノリ・カキの養殖棚が海面を覆う様相は近代以降に形成され、松島の代表的な景観をなす。また、湾奥部ではウナギ・アナゴをとるボダ漬漁などの伝統漁が現在も続けられ、地域の食文化を支えている。漁港や浜の背後にはそれを支える集落が点在し、各集落には倉庫や作業場として利用するため、近くの海食崖を掘り込んだ多数の岩窟（ボラ）がみられる。

こうした生業によって、湾内各地域では船だまりや漁師の働く姿など、日常生活で人と海が結びついた特色ある景観がみられるほか、それぞれの浜や集落には鎮守のための神社や寺があり、共同作業や祭祀などの場となっている。また、現在も浜ごとに獅子舞など独自の文化が多く残り、海食崖を利用した岩窟で少年たちが共同生活を営む年中行事、「月浜のえんずのわり」（国指定重要無形民俗文化財）もそのひとつである。

第３－６表　松島湾沿岸漁業と漁村景観の構成

カキ養殖棚	全域	－	松島湾は全国有数のカキの養殖地である。特に明治時代以降は、広島から技術導入された木材の杭を棚状に組み立てて行う景観がみられる。
東名・浦戸の種ガキ施設	東松島市 塩竈市	東名・浦戸	大正時代から養殖が始まり、大量の種ガキがアメリカに輸出された。現在も主産地として、カキの幼生を付着させる原盤や、原盤に使用するホタテの貝殻が積まれた景観がみられる。
ノリ養殖	全域	－	天然の岩海苔採取のほか、明治時代以降にノリの養殖が発展し、湾内漁業の中心となっていった。湾内では、海底に竹や木を使用した「ひび」が立込まれ、浜に養殖に用いる竹材が立てかけられた景観がみられる。また浜の近くに採取のための竹林が点在する。
ボダ漬漁	利府町	櫃ヶ浦	ウナギ楢葉漬、エビ笹漬など、竹竿に楢葉や笹葉が茂った枝の束をまとめて縄で吊り下げた「ボダ」を地先水面内に仕掛けられた景観がみられる。
宮戸の潮干狩場	東松島市	宮戸字波津々浦	東日本大震災以前の３～５月は、アサリ獲りをする大勢の家族連れで賑わった。
宮戸・浦戸諸島の岩窟群（住居・倉庫・作業場・風呂場・馬小屋ほか）	東松島市 塩竈市	宮戸・浦戸野々島・柏木島	宮戸・浦戸の各島で、崖下などの岩を手掘りで切り開いた岩窟（ボラ）がみられる。宮戸月浜ではえんずのわりのお籠もりの場として使用され、浦戸野々島には「内海長者」などの伝説もある。野々島漁港向かいの柏島（無人島）には、大小のボラがあり、造船場として使われたとされる。
宮戸島の岩窟を利用した祠	東松島市	宮戸字大浜	崖中腹の海を望む場所を穿ち、その中に神仏を納めている。
五十鈴神社・月浜のえんずのわり【国無形】・岩窟（籠屋・風呂場跡）		宮戸字月浜	五十鈴神社は月浜の鎮守。昔某皇子がこの地に行在所を定めた時に勧進したと伝えられる。えんずのわりは、月浜地区に伝承される小正月の鳥追いの行事である。子どもたちが岩屋でお籠もりをしてから、集団で家々を回り、害鳥を追い払う唱え言をいって、一年の豊作や無病息災を祈願する。社の近くには、えんずのわりで使用する岩窟があり、寝泊まりや風呂場として使用されていた。

鹿島神社	東松島市	宮戸字鹿島	室浜の鎮守。寛永年間 (1637-1643) に勧進された。本殿は金華山神社建築時の材を使用と伝えられる。
波島のハッテラ様 (八大龍王)		宮戸字室浜	大漁をもたらし、漁師を艱難から守る神として祀られた。地元ではハッテラ様と呼ばれている。
熊野神社		宮戸字里浜深海	里浜の鎮守として里浦の小島 (都島) に鎮座する。
観音寺本殿		宮戸字門前	文保 2 年 (1318) 開基、永正 2 年 (1505) 再興。曹洞宗、本殿は慶応元年 (1865) の再建。境内に多十郎の碑がある。
大高森山頂の雷神塔		宮戸字大高森	大高森山頂に所在。明治 29 年 (1896) 建立。旧暦 6 月 1 日に四ヶ浜の区長達が雷神塔に集まり、御神酒を持ち寄って、雨乞いをしたと伝わる。
潜ケ浦聖観音堂		宮戸字川原	宮戸にたどり着き出家した小夜子姫を夫と子が尋ねたところ、困り果てて鰐ヶ浦に身投げし、観音様になったという小夜子姫伝説があり、堂内に観音像を祀る。
鏡の神社		大塚字大塚	大塚の鎮守。某親王が宮戸浜についたときに、親王の携帯していた鏡を神体とした。
玉造神社・大曲浜獅子舞		大曲上台	玉造神社は、東日本大震災で被災後に再建された。正月には大曲浜獅子舞が奉納される。伊達家の家臣茂庭周防の命により大友源内豊国が大曲浜の住民に獅子舞を指導して奉納したのが始まりと伝わる。
白鬚神社本殿		野蒜字亀岡	野蒜村社。寛永年間 (1637-1643) の勧進と伝えられる。東日本大震災で被災し、野蒜亀岡に再建された。
海津見神社		野蒜字亀岡	亀岡の鎮守。地元の浜で引き網に毘沙門天がかかり、その像を祀ったと伝えられる。東日本大震災により被災し、白髭神社境内に再建された。
野々島熊野神社	塩竈市	浦戸野々島平和田	野々島集落の鎮守。昭和 54 年 (1974) 改築。
野々島の六地蔵		浦戸野々島	新墓地入り口に並ぶ六地蔵。
桂島松崎神社		浦戸桂島神手洗	桂島集落の鎮守。島名の由来である桂大納言の説話がある。境内周辺にはタブノキが繁茂する。
石浜神社		浦戸桂島石浜山神	石浜集落の鎮守。
寒風沢島神明神社		浦戸寒風沢	寒風沢集落の鎮守。平成 10 年 (1998) 改築。
寒風沢砲台場跡の小祠群		浦戸寒風沢	船入島弁財天大神、船入島龍神大権現、大根神社の３つの小祠をまつる。鳥居の奉納などがなされ、漁師の信仰を集めている。
寒風沢中月の金上祠		浦戸寒風沢中月	中月の畑地にある。明治 4（1871）・5 年頃に塚を掘ったところ、古鏡が 5 面出土。鏡は彦和田の内海兵助家の神棚に祭る。跡地に金山彦神を勧請。
寒風沢の六地蔵		浦戸寒風沢	一枚の石に地蔵を二体ずつ彫ったものを三枚並べて、その上に長い石で屋根を載せている。
寒風沢の化粧地蔵		浦戸寒風沢湊	古くからこの地蔵の顔に白粉を塗って祈願すると、美しい子宝が授かると言われており、今もなお信仰されている。
青面金剛像を祀る岩窟		浦戸朴島	岩窟に青面金剛像の石像を祀る。
朴島神明社		浦戸朴島宅地	朴島集落の鎮守。
吉田神社 (本殿・拝殿・長床・鳥居)・吉田浜獅子舞	七ヶ浜町	吉田浜字宮前	吉田浜の鎮守。創建年代は不明だが、古くから鹽竈神社の末社であり、鼻節神社の妃神 (天鈿女命) を祀るとされる。吉田浜獅子舞は同社の奉納獅子舞で、明治時代初期に石巻市渡波方面から伝わったとされる。祭礼の日に竜神講を組織し、大漁祈願・家内安全・悪魔払いを祈念して地区の家々を回り歩く。

鼻節神社 (本殿・拝殿・長床・神馬厩屋・鳥居)	七ヶ浜町	花渕浜字誰道	花渕浜の鎮守。当初は保ヶ崎に鎮座し、宝亀元年 (770) に現在の垂水山 (誰道) に移ったとされる。岩礁が続く沖合の安全な航行のために、岬の突端に鎮座する。明治の社殿改修の際、古銅印の「国府厨印」が発見された。鳥居は大正 3 年 (1914) 建立。
大根明神・大根明神祭 (アワビ祭)		大根	花渕浜東方 8km 沖合の暗礁で、大根明神として古くから信仰の対象となる。里宮は鼻節神社境内にある。大根明神祭 (アワビ祭) は、鼻節神社に大根明神の岩礁付近で採れたアワビを供え、海上安全を祈願するもの。岩礁付近で漁をしていた船の底に穴が開き、沈みそうになった際に船頭が鼻節神社へ一心に拝むと水が引き、後に船底を見ると大きなアワビが穴を塞いでいたという民話が伝わる。
諏訪神社		菖蒲田浜字和田	菖蒲田浜の村鎮守。創祀年代は不明。明治 12 年 (1879)6 月に村社に列せられる。7 月の例祭では神輿渡御も行われる。祭神の健御名方富命は相撲の起源にまつわる神でもあり、かつては相撲も奉納されていた。
五社明神		菖蒲田浜字招又	倉稲魂命、大己貴命 (大国主命)、太田命、大宮姫命、保食神の五神を祭神とする神社。
亀神社 (亀霊明神)・浮穴 (富結) の貝		松ヶ浜字浜屋敷	「浮穴の貝」伝承に登場する亀を祀ったとされる祠。かつては養松院境内にあったが、現在は個人の敷地内に小祠がある。浮穴の貝は、浜辺で助けた亀が南海の貝（オウムガイ）をお礼として持ってきたという伝承を裏付ける資料で、個人宅に代々伝わる。
孝子権右衛門の碑・鰐鮫頭骨収納箱及び釣針、頭骨		松ヶ浜	鮫に襲われ死亡した父の敵討ちの漁に出て、その鮫を釣り上げた権右衛門を伝えるために明治 35 年（1902）に建てられた碑と、説話を伝える鮫の頭骨と釣針、収納箱。収納箱の蓋には、藩主伊達重村に命じられた儒学者の田邊親子がこの伝説と収納箱製作の経緯を記す。
磯崎稲荷神社と「塩垢離」神事	松島町	磯崎字磯崎	創祀年代は不詳。往古は石崎明神と称し、社中豊公所贈の国字書を所蔵する。神輿に海水を振りかける「塩垢離」神事が伝わる。

カキ養殖棚

ノリ養殖

ボタ漬漁

浦戸の岩窟群

潜ヶ浦聖観音堂

鼻節神社

2　地域の歴史をものがたるものと構成

“ 松島の風景 ” や各地域の成り立ち・歴史を示す代表的な歴史的建造物や史跡などを時代順にまとめ、地域における景観の歴史的な特徴として 14 項目を例示した。

（1）松島湾沿岸の縄文時代貝塚群

松島湾は国内有数の縄文時代の貝塚集中地帯である。湾内にある多くの貝塚の中でも、里浜貝塚や西の浜貝塚などは、全国的にも重要な貝塚として評価され、海とともにあった縄文時代のくらしぶりを伝える。

第３－７表　松島湾沿岸の縄文時代貝塚群の構成

里浜貝塚【国史跡】	東松島市	宮戸里浜	縄文時代前期から弥生時代中期にかけての集落跡で、国内最大級の規模を持つ。
西の浜貝塚【国史跡】	松島町	磯崎字西の浜ほか	縄文時代前期から晩期、弥生、古墳、古代の遺構・遺物が出土する。長期間にわたる遺跡。
大木囲貝塚【国史跡】	七ヶ浜町	東宮浜字西大木ほか (指定地外)	縄文時代前期から中期にかけての大規模な環状貝塚。東北地方南部の縄文時代の標式遺跡のひとつ。

（2）古代から中世の伝承と信仰

古代陸奥国府の湊（国府津）に至る航路や、中世多賀国府の入口の一つであった松島は、和歌の歌枕の地であるとともに、多島海の美しい「勝地」松島の彼方に、東方浄土が想起された。各地には古代から中世にかけて信仰や伝承が今も残っている。

このひとつには、東北地方各地にのこる円仁（慈覚大師：794 － 864 年）の寺院創建の伝承が挙げられる。円仁伝承の背景には、平安時代における天台宗の教線拡大が想定出来る。

また、松島には諸国を旅した西行（歌人・僧：1118 － 1190）など、都の貴族に係わる伝承も各地にみられる。

第３－８表　古代から中世の伝承と信仰の構成

松島寺跡 (延福寺)	松島町	―	円仁により、天長５年（826）に創建されたという伝承がある。
湯ノ原温泉		松島字湯ノ原	松島寺（延福寺）創建の頃、円仁が水源を発見したともいわれる。小野小町の疱瘡の治療や、瑞巌寺の寺男にかかわる伝説がある。
葉山神社		松島字葉山沢	松島寺創建に関係する社ともいわれ、瑠璃光如来を本尊としている。社殿の後ろに葉山清水という泉があり、水が清くひでりにも枯れることがないという。
西行戻しの松【町史跡】		松島字犬田	松島滞在中の西行が、松島明神の化身である老翁との対話のなかで浅学を恥じて、松島を辞去した伝説を持つ地である。
紫神社		高城字城内二	松島町の総鎮守。平安時代天長年間 (824-833) には松島に鎮座していた。治承４年 (1180) に現在地に遷座し、源義経が武運祈願で訪れた際、村崎を紫雲山に因んで紫にしたと伝わる。
松島明神跡		松島字道珍浜	新富山の中腹にあり、現在の紫神社の前身とされる。
白坂不動・白坂不動の岩窟		高城字居網沢	京都伏見の法印白麟が永禄年間 (1558-1570) に不動明王を安置したと伝わる。白坂不動の小堂の背後に掘った岩屋に３体の仏像が安置されており、白坂不動井戸がある。地元では奥の院と呼ばれている。
医王寺本堂・医王寺薬師堂【市有形】・薬師堂下の岩窟	東松島市	宮戸字里	京医王寺本堂は真言宗。天長元年 (824) の開基で、貞享２年 (1685) に中興された。藩より寺領として田１町４段８畝、畑３反、山林３反が寄進されている。医王寺薬師堂は、真言宗京都智積院の末寺。建築年代は不詳だが、円仁作の本尊が安置されたという伝承があり、石灯籠銘から延宝５年 (1677) 頃まで遡る可能性もある。方二間 (正面のみ三間)、宝形造、桟瓦葺。薬師堂下には、薬師如来像が漂着した際に最初に祀られた岩窟がある。

大浜のお筆室	東松島市	宮戸字大浜	護良親王が宮戸に滞在していたとき、筆に使用していた「むろ（イブキビャクシン）」の枝を地面に挿したところ、根が生えたという伝説をもつムロの大木で、唐船番所の足軽詰所跡の傍らにある。
里浜の沖の井跡		宮戸字里浜	義良親王がこの地に参ったときに飲み水を求めたとの伝承が残る井戸。京都四条の沖の井に似ているところから名付けられた。
湊浜薬師堂	七ヶ浜町	湊浜字砂山	仁寿２年（852）に円仁が勧請したと伝わり、本尊は七薬師如来で円仁作とされる。湊浜の村鎮守。洞窟内に鎌倉初期と伝わる磨崖仏４体が本尊として現存し、宮城郡三薬師に数えられている。
春日神社	利府町	(指定地外)	藤原氏の祖神が祭られている。承和 10 年 (843) に陸奥出羽按察使藤原富士麿が多賀城に赴任した時、大和国の本社から分霊し、塩釜の上野原につくられた後、小野田改め今の春日に移されたと伝わる。
染殿神社と赤沼		春日字寒風沢	染殿神社は、平安時代に起源があるとされるが、詳細は不明。赤沼には平安時代にこの地に滞在した高貴な女性が染め物の技術を伝え、後にこれを称えて 滞在地跡に堂を建てたという貴種流離譚がある。

（３）中世松島寺（円福寺）の展開と霊場雄島の世界

12 世紀に平泉藤原氏の庇護下にあった延福寺は、鎌倉幕府と平泉藤原氏の奥州合戦（1189）で源頼朝に味方した。13 世紀半ばになると、延福寺は鎌倉幕府の執権・北条時頼によって、強制的に禅宗寺院（円福寺）に改められ、関東御祈祷所となる。

13 世紀後半には死者を供養する板碑の造立文化が松島にもたらされ、円福寺背後の崖面や海岸部、雄島で立てられていく。板碑の造立によって、松島は浄土の入口となる霊場の空間がつくられる。

現在の松島には、雄島の頼賢碑をはじめとして、石碑や石窟、石造物群などが数多くのこり、当時の多様な宗教活動や人々の信仰の様子を示している。

第３－９表　中世松島寺（円福寺）の展開と霊場雄島の世界の構成

中世円福寺の遺構	松島町	松島	瑞巌寺の地下に広がる中世円福寺に係わる遺構群。本堂改修時の発掘調査では、鎌倉から室町時代の四半敷をもつ瓦葺き礎石立建物跡が発見されている。
覚満禅師墓碑および防火石		松島字町内	覚満禅師（空厳覚慧）は瑞巌寺の前身である円福寺第６世住職で、鎮火の術を行った伝説があり、防火石はその時に水を注いだ石とされる。
円福寺（現瑞巌寺）周辺と海岸の板碑群		松島	現在の天麟院霊廟背後の岩窟、瑞巌寺から海岸にかけて約 60 点、文永 10 年（1273）から貞和４年頃までの造立が確認できる。
雄島の板碑・岩窟群		松島字町内 (雄島)	13 世紀後半から造立が始まったと考えられ、72 点が確認されている。雄島周辺の海底からも大量の板碑が確認されている。
奥州御島頼賢碑【重文】		松島字町内 (雄島)	頼賢の徳行を後世に伝えるため、弟子 30 余人が徳治２年 (1307) に建てた顕彰碑。
文永紀年の供養塔		松島字町内	中世の板碑で文永 10 年 (1273) の年号を持つ。砂岩。松島町で確認された板碑のうちで最古のもの。
弘安十年銘供養碑	塩竈市	浦戸朴島	中世の板碑で弘安 10 年 (1287) の年号をもつ。内海家によって代々観音様として供養されている。
建治三年銘古碑	七ヶ浜町	代ヶ崎浜字影田	中世の板碑で建治３年 (1277) の年号をもつ。梵字の阿弥陀曼荼羅、銘と願文が彫られている。

（４）伊達政宗による近世瑞巌寺の造営と展開

鎌倉時代に始まる円福寺は、江戸時代に仙台藩初代藩主伊達政宗により、臨済宗妙心寺派の松島青龍山瑞巌円福禅寺（瑞巌寺）として再興される。以後、仙台藩の庇護のもと、それまでは別個に存在した五大堂も管理下に置くなど隆盛を極めていく。

瑞巌寺周辺は、寺町の風情を持った趣のあるまちなみが形成された。現在は歴史的建築物のみでなく、周辺の林、寺町構想の一環として整備された石畳道路と沿道の生垣や黒杉板塀など、落ち着きのある景観をなす。

第３－１０表　伊達政宗による近世瑞巌寺の造営と展開の構成

瑞巌寺【国宝：本堂（元方丈）・庫裏及び廊下、重文：御成門附土塀・中門附土塀、県有形：総門】	松島町	松島字町内	臨済宗妙心寺派の寺院。本堂・庫裏及び廊下は慶長 14 年 (1609) 建築。他も同時代の建築と考えられる。本堂は桃山期大書院造りの方丈で、細部絵様及び欄間、扉の彫刻などに、桃山建築の特色がよく現れている。庫裏及び廊下は、内部に大小無数の貫梁を縦横に架し、両妻には大破風を飾り、平面も完成された禅宗庫裏の手法を有する豪快な遺構である。御成門は入母屋造で本瓦葺の薬医門。中門は切妻造でこけら葺の四脚門。総門は切妻造で本瓦葺の薬医門。
瑞巌寺五大堂【重文】		松島字町内	大同 2 年 (807)、坂上田村麻呂の創立と伝わる。現在の建物は慶長 9 年 (1604) に伊達政宗が再興したもので、方 3 間、向拝を付けて勾欄付縁をめぐらす。
陽徳院【重文：霊屋（宝華殿）、町有形：山門】		松島字町内	霊屋は伊達政宗夫人愛姫のものとして万治 3 年 (1660) に建築された。方一間、宝形造、銅板葺で、黒漆塗の華麗な装飾が施された繊細優美な建築である。山門は江戸時代のもので、明治以前は瑞巌寺参道両脇にあった塔頭寺院の門であったと伝わる。
圓通院【重文：霊屋（三慧殿）、町有形：本堂大悲亭・山門】		松島字町内	霊屋は二代藩主伊達忠宗の世子光宗のものとして、正保 4 年 (1647) に建築された。方三間、宝形造で、仙台藩の大工（棟梁：落合助左衛門、内藤五郎兵衛）の手になる江戸時代初期の代表作である。大悲亭は光宗が江戸藩邸にいたときの納涼の亭であったという。正保 2 年 (1646) 頃の建築とみられ、船で運ばれて移築されたと伝わる。山門は一間一戸の薬医門で、圓通院開山と同時に建てられたと考えられている。
松島の岩窟群（供養地）		松島字浪打浜ほか	中世から近世の岩窟群。雄島の 185 基をはじめ、小松崎、真山地蔵堂、天麟院裏、円通院裏、軒端屋、観瀾亭敷地内、埋木書院脇、参道東側、陽徳院裏、水主町、天童庵跡に所在している。
日吉山王神社【県有形：本殿】		松島字町内	もとは五大堂前に円福寺の鎮守として建てられた。現在の建物は三間社流造、銅板葺、前面三間向拝で、宝永（1704-1711）頃のものと考えられている。簡素ながら端正な建築である。
解脱院（地蔵堂）【町有形】		松島字町内	政宗の五大堂造営のきっかけとなったと伝わる地蔵堂で、医師真山玄川が建てた。昭和 12 年 (1937)、現在地に移築された。
天麟院		松島字町内	政宗夫人愛姫との間に生まれた五郎八姫の菩提を弔った寺。陽徳院、円通院と並んで、松島の三霊廟の一つである。
三聖堂【町有形】		松島字町内	天和 2 年 (1710) の建築。方二間、宝形造、茅葺。観音信仰者による建立とされ、観音を本尊とし、左に達磨、右に菅原道真を祀る。棟札に匠人として松島の勘兵衛、勘三郎の名が記される。